

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 趙 怡

趙怡氏の「金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学」は、金子光晴（1895～1975）と、その生涯の同伴者であった森三千代（1901～1977）の海外体験と文学活動とを実証的に跡づけ、金子と森の文学的営為を異郷文学の相の下に新たに意味づけた労作である。

金子光晴に関する研究は既に多くの蓄積を有するが、海外体験に関する研究にはなお課題とすべき点が多い。趙怡氏は、金子と森の中国体験とフランス体験について徹底的な再検討を行い、金子光晴研究にあらたな視角を導き入れることに成功している。ことに1977年に完結した『金子光晴全集』の「年譜」が含む多くの誤りを正し、『全集』未収録の多くの一次資料を発掘したことは、金子光晴研究に対する大きな貢献であると認められる。また、森三千代を一人の文学者として再評価し、金子と森とを対等の同伴者として、二人が共にした旅を、残された作品そのものから再構成することに成功している。森三千代研究としても成立しうる叙述の厚みを備えた論文である。

金子と森の海外体験、とりわけ中国との関係について精力的な資料発掘を行った趙怡氏は、主に三つの点を問題にする。すなわち、上海及びパリを中心とする金子と森の「放浪」をめぐる意識の問題、アジアの戦争への抵抗の姿勢の問題、さらには二人が自伝等の作品に残す自己表象の問題である。金子と森にあっては、東京と上海とパリとを結ぶ空間と移動の感覚が、つねに二人の文学的想像力を刺戟するものとして存在した。また、金子と森は魯迅、田漢、郁達夫、陳抱一、白薇など、のちの中国文化史に名を残す人々と密接な交流を持った。日中間の緊張関係を考慮するならば、それは金子と森という二つの個性によってはじめて可能となった面を持つであろう。さらには、結婚と離婚とを経ながら、金子と森が共有した「放浪」体験は、作品として表現される際、相互に微妙な差異を含むにいたる。趙怡氏が、具体的資料に密着しつつ、以上三点にまとめられる問題について、的確な議論を進めていることは高く評価されよう。

本論文は、序章に続く第一部「三度の中国行と「放浪の旅」」に収める第一章「初めての中国旅行」、第二章「上海と周辺都市の表象」、第三章「中国文化人との交流」、第四章「「放浪の旅」再考」、第五章「描かれた上海とパリの都市風景」、第二部「戦時下の海外訪問と異郷文学」に収める第六章「戦争の足音を聞きながら」、第七章「金子光晴・森三千代の「北支」旅行」、第八章「中国軍人「柳剣鳴」の形象」、第九章「森三千代の仏印訪問と南洋文学」、第三部「「自伝」という名のもとで：妻の語りと夫の語り」に収める第十章「二つの罇醜杯：それぞれの上海小説」、第十一章「夫婦それぞれのパリ物語」、第十二章「男と女、東洋対西洋の構図」と終章「生涯続く夫婦の旅」、及び付録と参考文献からなる。以下、論文の構成にしたがって概略を記す。

第一部では、金子と森が同伴するかたちで行った1926年の中国旅行、1928～32年の中国・東南アジア及びヨーロッパ旅行、1937～8年の中国旅行がとりあげられる。1920年代にはじまる中国旅行ブームや「支那趣味」を背景に、金子と森は、上海を足

がかりに南京、蘇州、杭州、武漢等を訪れ、現地の文化人と交流し、紀行詩、紀行文、回想等を残した。趙怡氏は、金子の記述に見られる記憶違い、誤記等を、広く周辺資料を勘合することによって正し、二人の旅に関するより正確な情報を提示している。また同じ体験にもとづく金子と森の作品を引用し、解釈することで、二人の関心のありかと資質の違いを浮き彫りにする。

第二部は、1930年代以降の日中戦争の文脈における金子と森の中国認識と人的交流、及び1942年に森三千代が単独で赴いた仏領インドシナの旅行が論じられる。1937年末から1938年はじめにかけて「北支」を旅行した金子と森は、戦争の現実に対し微妙に異なる反応を示す。また森の短編小説「柳剣鳴」に描かれる中国軍人のモデルとなった鈕先銘と森とのあいだに、浅からぬ関係があったことが指摘される。さらに国際文化振興会囑託として仏領インドシナを旅行した森の紀行文、及びフランス語で創作された詩も論じられる。金子と森が中国、アジア、「南洋」の認識において、共有する部分と共有しない部分を持つことが具体的に論じられるのである。

第三部は、自伝、回想に描かれる体験と、自己表象、自己認識を論じる。金子光晴の『どくろ杯』『ねむれ巴里』『西ひがし』の三部作は、金子の「放浪」を語った自伝として多くの読者を獲得しているが、記述内容をそのまま事実とみなすことはできない。趙怡氏は、金子の自伝三部作と森の作品を比較することによって、金子が語ることがらと森が語ることがらの異同を明らかにする。金子と森はパリ体験を共有するが、パリに対するまなざしは対照的である。趙怡氏は、金子と森の海外体験の記述を踏まえ、海外体験をめぐる性差、文化の違いに言い及ぶ。個人の経験とその記述に関する観察を、比較文化的考察へとひろげた部分と言えよう。

趙怡氏は、金子光晴と森三千代の海外体験、異文化観について論じつつ、同時代の歴史的な文脈についてすぐれた洞察を示している。あらたな事実の掘り起こしを含む点など、近代日本研究に資するところは大きい。

審査委員のあいだでは、金子と森の海外体験を文化史的、文化交流史的な文脈に位置づけつつ、多くの資料を発掘した点が高く評価された。バランスのとれた構成で、水準の高い叙述が維持される点も好ましい。取りあげられている人物に関して様々な関心が引き出さる点、日中関係をめぐり認識において二項対立的図式を免れている点、上海を論じる上で新たな材料を提供している点など、積極的に評価する点は数多い。

一方で、引用されている個々の作品をめぐっては、いくつか議論があった。金子光晴と森三千代のテキストの解釈にあたっては、日本近代詩及び日本語表現史の知識をふまえるべきであるという指摘は、今後の課題として十分意識されねばならない。また森三千代の再評価について、これを首肯する意見と、やや疑問視する意見の両者があったことは付け加えておかななくてはならない。さらに論文題目にあらわれる「異郷文学」という概念の曖昧さを問う意見もあった。ただしこれらの点は、いずれも本論文が持つ学術的価値を本質において損なうものでないことが、審査委員において確認されている。

よって本審査委員会は、趙怡氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。